

子どもの発達・学力と健康に視点をおいた メディアリテラシー教育指導法の研究

増田 修治・成田 弘子*

研究実績の概要

【意義】

かねてから私は「スマホ・ゲーム機など電子メディア機器の長時間接触による子どもの体への健康被害」について問題提起して来ましたが、さらに「学力」問題の研究が明らかになってきました。「スマホ使用と学力の関係」は多くの保護者や教育関係者の関心の高い問題だということに異論はないと考えますが、この問題に関する情報が発信されているにもかかわらず、マスメディアの報道がごく少ないのです。

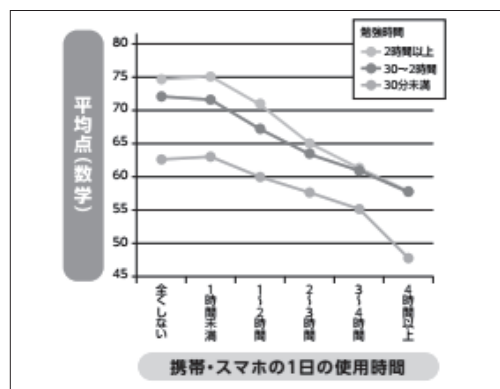
脳科学者であり、「脳トレ」で著名な東北大学の川島氏は、仙台市教育委員会と東北大学との共同調査で、仙台市内の小中学生7万人に対し、「スマホの使用が子どもの認知機能に与える影響」を7年前から調査してきました。

そこで明らかになったことは、「スマホやゲーム利用が1時間未満までは、勉強時間と成績は正比例しているが、1時間を超すと顕著に成績が低下する」というものです。

（「スマホ使用時間と数学の平均点との関係」に関するグラフ（図1）参照）

「家庭学習が30分未満でスマホも1時間未満の生徒」の平均点は63点、「家庭学習を2時間以上してスマホも1時間未満の生徒」は75点です。ところがスマホ使用時間が長くなるほど平均点が明らかに低下しています。さらに驚くべきことはスマホ使用が3時間以上になると、「勉強時間30

分未満でスマホも1時間未満の生徒」の平均点63点よりも低下していることが読み取れます。つまり「家庭学習を全くしないけれどスマホも1時間以内の生徒」のほうが「家庭学習を2時間以上しているがスマホも3時間以上している生徒」より成績が良いという結果です。



〔H25年度 学習意欲の科学的に関するプロジェクトパンフレットより〕

図1 「スマホ使用時間と数学の平均点との関係」

【具体的指導法】

児童・生徒への「メディアリテラシー教育」授業では、当事者である児童・生徒に図1の実際の東北大学の研究によるエビデンスを提示し、自分で、そしてグループで考え合うアクティブラーニングを実施し、自身で「スマホ・ゲーム機の使い方方をコントロールできる力」を養っていくことが求められていると考えます。

この1年間、依頼のあった小・中学校の児童・生徒に本授業を実践し、本人に自分の問題として認識する授業実践を更に続けていきたいと考えています。

*嘱託研究員
白梅学園大学非常勤講師